



講演 5

古文書から覗く日本人

人文科学研究所准教授 岩城 卓二



岩城と申します。よろしくお願ひします。万能研究から一転して、万能ではない研究のお話をさせていただこうと思ひます。

日本の江戸時代の文書の残存点数は、前近代では世界有数です。総点数は、誰もわかりません。ちなみに私が今調査している島根県の家には、約1万点残されています。もう1軒は、約7万点です。1万点を調査して、まとまった成果をあげるのに15年もかかっていますので、7万点がいつ終わるのかはわかりません。

みなさん、古文書をご覧になったことはありますか。これは10代半ばの女の子の手形が押された非常に珍しい文書です。この文書には江戸時代の姉妹の悲しい人生の物語が秘められています。

これは農業水路を示した絵図です。江戸時代の古文書には、こういう絵図もあります。

これは、中高の教科書にも登場する太閤検地帳です。日本中の村ごとに作成され、一筆

ごとの土地の面積・石高・所持者が記されています。米の生産高で国内の生産力を把握したのが日本の江戸時代の特質で、これを石高制といいます。

では皆さん、1石は何キロかご存じですか。1石は約150キロです。1日1人の大人が食べる米はどれくらいかという、大体、3～5合ぐらい。1年の食糧は、約1石5斗位になります。1石5斗の米を生産するには、非常に良質の田で約1反必要です。1反の田は、600畳位になります。お父さんとお母さん、そして子ども2人の家族が生きて行くには、3,600畳の田が必要ということになります。江戸時代は、農業社会で、稲作を営み、勤勉であったというイメージが非常に強いと思いますが、果たして、お父さんとお母さん2人で3,600畳も耕せるでしょうか。おそらく無理でしょう。

そうすると、江戸時代の農民はどうやって生きていたのでしょうか。実はほとんどの農民が農業以外にさまざまな仕事を組み合わせながら生きていました。複合生業といいます。現在の江戸時代研究では、農民は複合生業であったと考えられています。



今日は、まずこの複合生業についてお話しします。例とするのは石見国、現在の島根県です。石見国は、中高の教科書や一般書ではあまり登場しませんが、石見銀山は御存知の方も多いと思います。16世紀には世界の産出銀の約3分の1は日本銀であったと考えられています。石見銀山はその中心でした。江戸時代の石見国は、江戸幕府にとって、貨幣の鑄造原料を採取する重要地域でした。

検地で掌握された石見国の総石高は、約14万石です。内3分の1、約5万石が幕府の直轄領でした。1石150キロですから、その5万倍という大変な量になります。ちなみに加賀前田家の100万石は、150キロの100万倍の米の生産高がある領地を有しているのですから、巨大なことがわかります。

では、石見国で起こった「不作なき飢饉」のお話しをはじめます。江戸時代、食糧不足をもたらす飢饉は何回か起きています。全国的飢饉は4回ですが、ふつう飢饉は天候不順を理由に起こります。4回の巨大飢饉のひとつである天保の飢饉では、石見国内も大きな被害をうけることとなりますが、古文書で時間経過を追っていくと、既に関東・東北地方は大飢饉となっていた1833年（天保4）、実は石見国は平年作でした。

ところが、幕府領では食糧不足が危惧されています。翌34年、石見国内は豊作ですが、食糧不足はさらに深刻化しています。35年末には、石見国内で「はやり病」が流行し、飢饉状態となり、多くの餓死者が出ています。おそらく、この「はやり病」は石見国を往来する北国廻船等によって他地域からもたらされたのだと、思います。

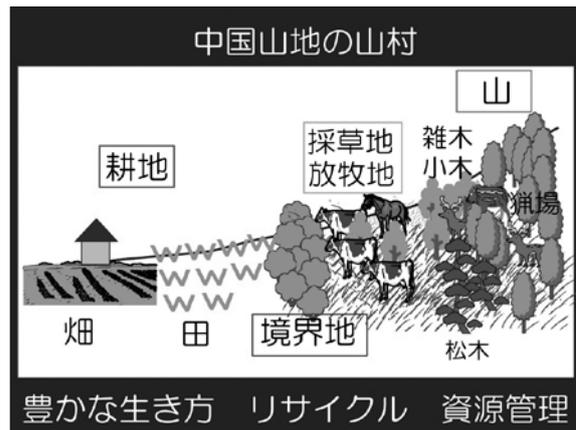
「不作なき飢饉」の背景について古文書には、「余国に引き比べ候ては、違作にこれなく、もっとも夫食には差支え候」と記されています。「他国に比べると、石見の国は不作ではないが食糧には困っている」ということです。なぜそういうことになったのかというと、北国・関東が凶作のため、石見国に米が入らなくなり、穀物の値段が高騰しているからだと言われています。この古文書の記載からは、どうやら江戸時代後半、19世紀中ごろの石見国は、食糧である米の供給を他国米に頼っていたことがわかります。他国というのは外国ではなくて、北国・関東地方のことです。

そうすると、江戸時代の後半の石見国は、水田稲作を営む農業民が大半で、農業に専念していたという一般的イメージとは違う社会であったことがわかります。石見国内は平年作であっても、北国・関東地域が不作になると、食糧不足が危惧される。どうしてそんなことになるのでしょうか。

これは非常に稚拙な図ですが、古文書から復元した石見農村の空間利用を現したものです。私たちの研究は、残念ながら江戸時代の現場を肉眼でみることはできません。古文書を手がかりにするしかありません。それでも、丹念に読み込むと、この程度の復元はできます。

さて、どのように空間を利用しているかということ、まず田と畑、農地があります。田と畑の面積は大差なく、とくに山間部では、畑が広がります。

牛馬の放牧も重要な生業で、田畑と奥山の境界に放牧地が広がります。中国山地は高い山が少なく、放牧に適していました。牛馬は棚田を耕作する農耕用の他に、銀・銅・鉄等の鉱物資源の輸送手段を確保するために放牧されましたが、人々の日々の生活とも深く関わっていました。放牧地の雑草を食べさせ、排泄物を農耕肥料にするという循環が行われていましたが、人々にとって重要なのは、雑草を食わせることで、田畑と奥山の境界地に見晴らしの良い空間をつくることでした。見晴らしの良い空間ができると、奥山に生息する動物が田畑や集落に進入できにくくなるからです。隠れ場所がなくなるので、動物たちは、田畑の作物を荒らすことが難しくなるのです。うまく空間を利用していたことがわかります。



棚田の傾斜地・畔地では、菜種・食糧が生産されました。自家用の生活必需品の確保が目的でしたので、手入れはあまりしなかったようです。「捨てづくり」と呼ばれるものです。さらに田畑の周辺には生活に役立つ低木の樹木を植えました。動物の侵入を防ぐ目的もありました。

山の利用をみると、雑木・小木は、燃料となる薪や炭となりました。鉱山地帯である中国山地では、鉱物資源を製錬するため炭が必要であったため、幕府も計画的な利用と、資源の確保に努めました。3～5年伐採すると、5年間程、伐採が禁止されます。木々の成長を待って、そしてまた伐採するということを繰り返すことで、資源を守りました。松木は、主には水利施設の用材となりました。このさらに奥山には動物の生息域でしたが、この空間は猟師たちの猟場になりました。生業による空間の棲み分けです。

こうした空間利用は人々の生業を反映していました。農耕だけでなく、放牧、山稼、さらに牛馬輸送の手伝等の賃稼ぎをしながら生きていました。つまり農民の大半は専業農家ではなく、兼業農家でした。それは石見だけでなく、江戸時代の農民の一般的な姿でした。こうしたことを御聞きになると、江戸時代は、循環型社会であった。うまく空間を利用して、生業を組み合わせ生きていたという印象を持たれると思います。事実、江戸時代は資源管理ができたリサイクル社会であったという評価がされるようになっています。たしかにそういう面はあるのですが、この江戸時代像に欠けているのは、江戸時代が石高制の社会であり、幕府・大名は、田畑からの年貢で財政を成り立たせていたということです。農耕、とくに水田稲作を放棄して、他の生業に専念することは許されませんでした。つまり農耕強制力が働いており、農民の生業は農耕を基本にしなけりならなかったということです。

そもそも石見の山間部農村の人々は、田では米、畑では粟・稗・芋等、そして山から蕨・葛の根を採取しながら生きていました。多様な場所から、多様な食糧を確保して生きてい

ました。それは、危機の分散でもあります。つまり、稲作が不作でも何とか生き延びていけるような仕組みを自分たちでつくっていたのです。ところが石高制によって畑・山の生産力も米で掌握され、年貢が徴収されるようになりました。検地で把握されて以降、その土地の利用形態が変わっていても、年貢は徴収されました。

幕府領では、田の年貢は米納が基本でした。ですから米は絶対に確保しなければなりません。畑・野山も米の生産高に換算されていましたが、これらは米納・現物納ではなく、貨幣納が基本でした。

年貢米は、幕府・大名の財源であり、武士の給料となりましたが、江戸時代の米の役割は軍事兵糧米です。最近、江戸時代の平和が強調されますが、江戸時代の基本は軍事体制の社会です。石高制は、その基本的枠組です。次第に軍事的緊張は緩みますが、軍事国家としてつくられた国家・社会の基本的枠組みは変わりません。いつでも戦争ができる態勢が整備されていたので、一定量の兵糧米が全国で備蓄されていました。幕府領の年貢は、この備蓄兵糧米にあてられました。

江戸時代には、40万、50万、100万人もの人々が暮らす江戸・大坂のような巨大都市が誕生します。それは食糧自給できない人たちが、集住する場所ができるということです。これら巨大都市は幕府の権力維持にとって重要な場所でしたので、安定的にその食糧を供給しなければなりません。石見の幕府領の年貢米は、巨大都市の食糧に廻されました。石見国内の食糧が不足しても、江戸・大坂等巨大都市の食糧は確保されました。巨大都市で食糧不足が起こることは幕府の存立を脅かすことになるからです。

兵糧米と巨大都市の食糧確保のため、水田稲作は維持されなければなりません。農耕強制力とはこういうことです。先ほどの図で少し申し上げますと、農耕強制力というのは、放牧をやっている、例えば、農業、とくに水田稲作に支障が出るような放牧は禁止されます。あくまでも農業に精を出したうえでの放牧、山稼への従事でした。

畑の年貢も貨幣納になると、何でも自由に栽培して良いという訳にはいかなくなります。換金できる商品作物を栽培しないと、貨幣が手に入りません。幕府も畑や空地を利用する商品作物生産を推奨しました。さらに、幕府による山の資源管理も、あくまでも幕府の貨幣鑄造原材料を確保するために必要な鉱山を維持するための資源管理であって、そこに生きる人々の生活を守るためのものではありません。

一見すると、うまく空間を利用し、資源管理がなされているかのように思える石見国の農民の複合生業には、こうした幕府による圧力がかかっていた。生業のあり方は自分たちの意志だけで決められるものではありませんでした。そのうえでの複合生業でした。

米は17世紀には高く売れました。良い商品作物でした。そのため石見国の農民も、新田開発に精を出します。自ら生業のあり方を水田稲作中心に変えようとしたという見方もできます。ところが18世紀に入ると、米価は下落します。米の商品価値が下がるのです。結果、無理に新田開発をしたところには、広大な荒れ地が発生します。空間利用・生業の

バランスは崩れ、農耕を放棄する人々が生まれるようになります。そして他国米への依存が高くなっていきます。19世紀の石見国の幕府領では生産した米は兵糧米・巨大都市の食糧として年貢徴収されるため、国内の生産米では食糧が賅えなくなりました。そこで食糧用に他国米を購入するようになっていたのです。その他国米の供給先が東北地方でした。ゆえに東北地方が大飢饉に見舞われると、石見国の食糧事情が悪化したのです。

「不作なき飢饉」とは、水田稲作の強制力、米価高騰の時流に飲み込まれた農民自身の選択によってもたらされたものでした。生業を貨幣の確保に傾斜させ、貨幣さえあれば食糧など手に入るという社会と、人々の思い上がりへのしっぺ返しが、石見の天保の飢饉であったと言えるかも知れません。

最近の江戸時代賛美論への違和感から否定的なことを強調しすぎました。では、こうした社会のなかに可能性はないのか。「危機を乗り切る」という点から、天保の飢饉で起こったことを古文書からみていきましょう。

他国米が不足した1834,35年、石見の幕府領では、ある富裕者が、自分が築き上げていた人脈を駆使して、他国米を大量に買い付け、地域に放出します。そのため、石見幕府領は一旦、食糧危機を乗り切ります。結局「はやり病」のため餓死者を出す飢饉状態にはなるのですが、その富裕者は私財を投下し、地域に食糧供給をしました。

このことは、石見の幕府領というひとつの小社会が成り立つ上で、富裕者が、大きな役割を果たしていたことを教えてくれます。その富裕者が、私が15年間も調査している1万点の古文書を所持する熊谷家の御先祖です。幕府の石見大森代官所がある大森町で問屋を営んでいました。この家の江戸時代の当主たちは、飢饉の時以外にもしばしば社会資本の整備のために私財を投下しました。そのことをお話しすることも必要かとは思いますが、ここからは、天保飢饉における他国米購入等、地域・家の危機を乗り切る際に駆使されたこの家の情報網についてお話しすることで、江戸時代における富裕者の役割を考えていくことにしましょう。

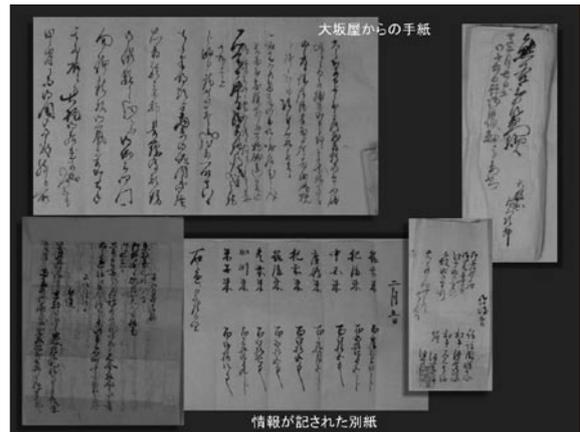
古文書にはそれぞれ特性があります。熊谷家文書の特性は、膨大な手紙が残されていることです。その多くは私信です。

手紙は、古文書の中でも厄介な史料です。それはくずし字の判読や文意を確定するのが難しいからです。並の古文書の読解力では、歯が立ちません。ですから私は15年もかかってしまっているのです。でもこの家の手紙はとても面白く、研究でよく利用される公文書ではみえてこない江戸時代に迫ることができます。

この面白さを大坂の商人である大坂屋貞次郎から熊谷家当主宛の手紙を例にお話ししていきましょう。江戸時代の手紙は、和紙で包んだり、封筒に入れて運ばれました。手紙の本文は、紙をつぎ合わせたものに記されています。長さ1メートル程度が多く、3メートル以上に及ぶ長文も少なくありません。

大坂屋からの手紙には、大坂の米相場情報、江戸城での大名・旗本への申渡しを記した

「沙汰書」等も別紙として同封されています。江戸から大坂の幕府役所に連絡された幕府役人の人事情報や、幕府が大坂の町で出した町触を大坂屋が書き写したものが同封されていることも多いです。熊谷家は、大坂に居る大坂屋を通じて、たくさんの情報を入手していたことがわかります。では、この手紙は、どうやって郵送されていたのか。歴史に詳しい方はご存じだと思うのですが、中高の教科書



でも江戸時代には民間の飛脚屋が発達したといわれています。でも、飛脚屋は、江戸と大坂、大坂と城下町、城下町と城下町といった主要都市間を結ぶものでした。京都と群馬の桐生のように絹織物の産地間では、商用の手紙が多かったため飛脚便が開通しました。つまりたくさんの手紙が交わされ、民間事業として経営が成り立つ地域間にしか飛脚便は開通しません。

石見銀山をはじめ山々に囲まれた大森町に住んでいる熊谷家と近隣の人々を結ぶ飛脚便は開通していました。ところが、大森町から大坂への定期民間飛脚便は開通していませんでした。利益が確保できる安定した需要がないからです。そうすると、大坂に手紙を出すには、相当なお金を積んで、わざわざ飛脚便を用意しなければなりません。そこで、大坂方面に移動する人に手紙の郵送を託すことが一般的なやり方でした。

ところが、これはすごく時間がかかるし、いつ、大坂方面に向かう人が見つかるかわかりません。そのため大坂の知人と手紙を遣り取りするにはたいへん難しいことになります。しかし熊谷家と大坂屋は、この不便さを解消していました。江戸・大坂の幕府役所と地方役所を結ぶ公的通信網を利用していたのです。

江戸幕府は、全国を支配するため地方に役所を設け、この役所に指示・命令をするため、御用便という公的通信網をつくっていました。公的な通信網で、公文書や役人間の仕事の手紙が郵送されました。熊谷家と大坂屋は、この公的通信網である御用便に、自分たちの私信を紛れこませていたのです。それができたのは両家が幕府の公金を扱う御用を務めていたからです。御用便の利用は役得ともいえます。したたかに権力を利用していたともいえます。

大坂屋から熊谷家宛の手紙を例にすると、大坂屋の手紙は、封筒や包み紙に入れられています。その中には手紙と、先ほど言ったさまざまな情報が記された別紙、さらに他人から他人宛の手紙も同封されていました。すべて私信です。封筒・包み紙には、差出人大坂屋と宛名人熊谷家の名前が記されているだけなのですが、中には別人の手紙が入れていたのです。つまり、大森町－大坂間は民間の定期的な飛脚便は開通していなかったのですが、御用便という公的通信網を使って、人々の私信が遣り取りされていたのです。熊谷

家と大坂屋は、周囲の人々の手紙の遣り取りを手助けしていたのです。

熊谷家は大坂屋からの手紙は読みます。情報が記された別紙にも目を通します。別紙の一部は近隣の知人たちに回覧しました。知人たちは熊谷家を通じて、さまざまな情報に接していたのです。そして同封されていた他人宛手紙は、熊谷家が宛名人に配達しました。熊谷が大坂屋に手紙を発送するときは、この逆のことが起こります。私信の他に、熊谷家が入手した情報が別紙に記され、知人の大坂方面への手紙が同封されました。1年間に熊谷家と大坂屋の手紙の遣り取りは、30往復程行われました。だいたい10日に1回、大坂屋から手紙が届くと、熊谷家が返信する。熊谷家は、定期的到大坂の米相場・貨幣相場、全国の政治・災害情報等を知ることができたのです。これは民間の飛脚便を利用してはできません。御用便という公的通信網に、私信を紛れ込ますことで可能になっていました。そして他人の手紙も配達する。つまり両家は地域の郵便局の役割も果たしていたのです。

熊谷家は同様の情報ルートが大坂屋以外にもつくっていました。それは全国各地に及んでいます。集めた情報は自分で分析もしています。ひとつの情報は、他の情報と突き合わせて分析します。ですから、誤情報は相手との信頼関係を失いました。

最近の私たちのメールでは、いきなり用件から始まることが多いと思うのですが、江戸時代の手紙では、こんな無作法なことはありません。必ず最初に時候の挨拶をします。あなたのご家族はお元気ですか。私の家族は元気ですよ。お互いの家族の近況を尋ねました。これは手紙にとっては、たいへん重要で、両者の親密度の深さが窺えます。ただ情報を遣り取りしていたわけではなく、家同士の強い信頼関係に支えられていたのです。

熊谷家の情報網とはこうした人脈の上に築かれたものでした。しかし、この人脈の相手とは、直接会えることはほとんどありません。そこで年賀状、お中元、お歳暮は、きっちり行いました。相手の依頼には全力で応えようと思いました。人脈を維持するためには、ものすごい手間と努力が必要でした。

先ほどの天保の飢饉の話ですが、熊谷家がどうして他国米が不足していたときに、米を買いつけることができたのかということ、それまでに構築していた人脈と情報網を駆使して、どこで買えるかということ判断したからです。結果、3,000石という大量の米の買い付けに成功しました。その他国米を地域に放出することによって、石見の幕府領は危機を回避できたのです。

熊谷家は、危機の時だけでなく日常的に、地域の安定・発展のために私財を投下しました。道が壊れてきたら普請のため、年貢米の積み出し港の整備のため、資金を提供しました。こうした熊谷家のような富裕者は日本の各地にいました。それが江戸時代でした。

古文書にはこうした富裕者のことを「奇特なる者」と記されています。「奇特なる者」が各地の小世界にいて、私財を社会のために投下する。この力が江戸時代の平和を維持していたともいえます。こうした私財の投下がハードな社会貢献であれば、今日お話しした

人脈と情報網による私信輸送・情報公開はソフトな社会貢献です。人脈と情報網は、地域社会の安定・発展のために役立っていたのです。富裕者も地域社会に一員であるという強い自覚を持っていたのが江戸時代でした。

早口でお話ししてきましたが、人文科学研究所というのは、いろいろな分野の研究者が約50人おられます。江戸時代研究者は私1人ですが、分野の垣根をこえて共同研究を行っています。現在、18の共同研究が行われています。私が今年所属していたのは3つで、そのひとつが「環世界の人文科学」という生き物にとって生きるとは、どういう営みなのかということ、人文科学で考えようという共同研究です。今日の複合生業は、その成果です。

もうひとつが「現代世界とは何か」という共同研究です。江戸時代から現代世界とは何かを考えるのは、とても難しいですが、仕事としてそういうことを考えなさいという圧力がかかるので、無理にでも考えるようになります。苦痛ではあるのですが、面白い営みでもあります。他の先生方も仰っていたように、研究は疑問を持って、それを知りたいという欲求がなければ続きません。それは歴史研究も同じです。

歴史研究の素材になるのが資史料です。江戸時代研究では、まず古文書が読めるようになる訓練を受けなければなりません。そこから意味を確定し、事実を明らかにし、それら諸事実を組み合わせて歴史像を考えるのですが、重点の置き方は研究者によって違います。

今日お話ししたように、私が江戸時代を考える上で重点を置いているのは領主権力の力です。ですから私は史料の中から、領主権力の力というものを読み取ろうとします。当然、領主権力の力を重視されない研究者も居られます。

すると、同じ史料でも読み方が異なります。反応する箇所も変わってきます。だから歴史像というのは、ひとつではなくなります。力点を置く場所が違うので変わるのです。ですから、歴史の勉強は暗記することではなく、考えることに意味があるのです。

ただし、間違えないでいただきたいのは、それは事実をもとに考えているのであって、空想ではありません。古文書という歴史の証人から明らかになる事実をもとに考えています。

私が、真剣に歴史研究を始めたのは人より随分遅かったと思います。でも、研究を始めると、いろいろな危機に直面しながら、人間の生きる、生き抜く力はすごいと思うようになります。平時の危機管理がどれだけ行われているかが大切なこともわかりました。熊谷家の人脈と情報網は、平時の危機管理といえます。

それから私は、曖昧な決着が大切だと思っています。49対51の決着です。一人勝ちもしないし、一人負けもしない。ですから、そういうことがわかる古文書に敏感に反応します。実は手紙には、こうした曖昧さがたくさん記されています。公文書では一人勝ちしたかのように記されているのですが、実は49対51の曖昧な決着であった。江戸時代は、こうした曖昧さが重視される社会で、グレーゾーンがありました。私は江戸時代の研究からそれを学んでいます。

最後に一点。歴史研究に大切なことは局面を切り取らないということです。先ほど申し上げたように、牛馬の排せつ物を肥料に再利用する。放牧地をつくって奥山の動物が田畑を荒らさないようにする。そこだけを切り取ると、循環社会、あるいは動物との共存がクローズアップされるのですが、そうした人々の生き方は、農耕強制力によって揺れ動かされ、いつ壊れるか分からないという危機と隣り合わせでもありました。局面の関係性と、幕府・大名の巨大な権力の力を合わせて考えないと、江戸時代の人々の生き方、生き抜く力量を評価できないと考えております。

早口なうえに、まとまりのない話になりました。諸先生方の壮大なスケール研究に比べると、ミクロの、地べたをはうような研究ではありますが、そうした研究も必要であると感じていただき、歴史学は暗記するだけではなく考える学問であるということを御理解いただければ幸いです。どうもありがとうございました。

※なお、女の子の手形の写真は、『図説尼崎の歴史』上（尼崎市、2007年）より転載した。